Andante

渕言址

アンダンテ

息をつく間もない時間(とき)の流れが
永遠に続くかと思われて耐え難い毎日を
なおも逃げ去らず前のめりに風に向かっていると
ふと訪れる、凪の静かな一日
全てが報われ、流れ出す旋律は優しい

自分の身体が次第に薄らいでゆく
あるいは午後の港の波のささやきの中に
あるいは小さな庭に降り注ぐ陽光(ひかり)の中に
様々な柔らかい表情が微風と織り成すハ―モニ―
流れ出る、四重奏(カルテット)、協奏曲(コンチェルト)、そして交響曲(シンフォニー)

哀しいアダ―ジョほどはゆっくりでなく
楽しいアレグロほどは速くでなく
言葉は要らなくなり、目を閉じてさえも
やはり変わりない風景が見える
そして自分がそれに包まれていると感じられる

そんなひと時の後に再び風は強くなってゆく
人は、あるいはボラ―ドから、あるいはベランダから
ゆっくりと立ち去ってゆく、風に向かうため

途切れ途切れでも必ずやって来てくれる
風に向かう人にはきっとやって来る
哀しいアダ―ジョほどはゆっくりでない
楽しいアレグロほどは速くはない
そんな一日が

(1984.2.28)

お宝

真っ暗な公園の入り口に
置き忘れられているのは
おや、補助輪付きの自転車です
前カゴにボ―ルを乗せたまま

ぐっすり眠っていましたよ
今日は暖かい夜でよかったね

でも、ちょっと待て、と
僕は自転車のブレ―キをかけた
もしや…

案の定、公園に居ましたよ
灯りに照らされたお砂場に
ひとりで遊ぶ男の児が

シャベル持って
ぽつぽつ掘っていましたよ

(何をお探し?)

すると彼はきょとんとした後
ニッと笑ったのです
泣いた跡のある顔で

（お宝！）

僕らはすぐに帰りました、もちろん
公園の入り口までは一緒に
だって、雨も降りそうでしたしね

（はて、お宝って？）

僕は考えちゃいましたね
暫し腕組みして

（2000.1.6）

片隅

僕を遠くに運ぶものを
止めないでほしい
貧しさへと
愛しさへと

ああ、どうして
どうやって人間(ひと)は
微笑むことができるのだろう

僕の眼を吸い寄せるものを
さえぎらないでほしい
みじめさを
切なさを
ああ、どうして
どうやって君は
抱き上げることができるのだろう

陽光の温かさに
そして涼しさに胸をつかれ
君は駆け下っていった
陽光が温めることのできぬ所へと
切なさが君を温め
みじめさが君を微笑ませる
そんな所へと

だが君はまだ知らない
君の哀しみが
哀しみへの愛が
君以外の者から
陽光の温かさを奪い去ることを
この僕を放浪わせることを

(1999.6.16)

日々

生きることに疲れ
それでも生きることを愛し
夢見ることに疲れ
それでも夢を抱き締め

寂しさに膝を抱え
それでも必死で信じ
後悔に寝返りを打ち

それでも前のめりに歩き
迷いに部屋を歩き回り
それでも一歩を踏み出し
怖れに八方を取り巻かれ
それでも目を見開き

生きることから逃げ出せば
生命の力に追い立てられ
愛することから逃げ出せば
淋しさに胸を締めつけられ

信じる事を冷笑すれば
空しさが感情を食いつくし
苦しむ事を避ければ
その苦しみに追いかけられ

生きることが下手な者達の
日々は流れる
単調なようにも

加速されたようにも
(1986.7.2)

送り火

私鉄を降りていつもの街路を歩くと
ふと近付いてくる
ひとつとふたつのほの明り

ひとつは大きめ
ふたつは小さめ
右や左に揺れながら
街灯のうすみどり色をこちらへと

夏の名残の送り火は
揃いの浴衣を映し出し
ふた子の幼い娘は父親に

少し遅れて手をつなぐ

と胸をつかれて立ち止まる
儚いゆらめきを見送りながら
流されてゆく人の生活(くらし)と
流されまいとする希望(ねがい)と

あやふやな、それでいて確かなものを
僕は見ていたのだろうか
絆という糸の細さと強さとを
薄ぼんやりとした愛の優しさと強さとを

小さなふたつの微笑みが
消え入るように夜の中へ
サンダルのぱたぱたという音を残し
大きめの灯りに導かれ

ひとつは大きめ
ふたつは小さめ
右や左に揺れながら

夏の名残りの送り火は
僕に告げてもいたろうか
人の心の色合いを

(1985.8.15)

神苑

池面に花は映り
花の中を鯉は泳ぎ

水中花に雨は落ち
揺らめきに花は消え

池面に花の雲はあり
空には薄墨の雲はあり

飛び石を渡り望めば
ああ、神宮の鳳凰が啼く

紅の枝垂をくぐり抜ければ
ああ、僕はひとつの笑顔を思い出していた
(1985.4.7)

雪ん子

真っ白い子供たちが風に抱かれて
はしゃぎ回る、今日は待ちも雪ん子の遊び場
無邪気な御遊戯で埋めつくされて
大人たちは皆んな肩をすぼめて
それでも少し笑って帰宅の途に
ふるさとの大雪を思い出す人もいて・・・・
知らぬげにはしゃぐ雪ん子たち

街の子供たちも一緒にはしゃいで
雪ん子になる、今日は街も真っ白の遊園地
まだ軟らかい雪玉をぶつけられて

僕は半分、気もそぞろで
それでも少し笑って帰宅の途に
得たものと失ったものにふと気付いて・・・
知らぬげにはしゃぐ雪ん子たち

（1984._）

ソナタ

1．ヴィヴァ―チェ・マ・ノン・トロッポ

強い風が行く手をさえぎろうとする
前のめりに身体を折ってこらえる―――ふたり
こんなにもためらいがちな出会いの中に吹きつける

静かなディナ―の会話のように落ちてくる
「素敵じゃない」「うん」と呟く―――ふたり
賑やかな街の中にこんなひっそりとした歩調

降りしきる雪に足をとられ、よろめく

胸ポケットのしわくちゃの封筒に掌(て)を当て――――ひとり
哀しい別離の中に「陽光(ひかり)」という一語が残る

2．アダージョ

切なさと、淋しさと、毎日と
そして、見上げる太陽のやわらかな光と

明るさに満ちた季節と、そして人々
その中にひっそりとうずくまるように

想うということを確かめたいという希いと
自分の愛と君の温もりを感じたくて

ほのかな、そしてかすかなものを受けとめ続ける
そっと、おだやかに、そして孤独に・・・

3．アレグロ・モルト・モデラート

諦めに似た哀しみと

哀しみに似た愛と――――
そんな場所から光と水のさざめきが滑り出す

あやふやな、しかし暖かな感触
包まれてゆくような、抱き上げられるような――――
小さな輝きの粒が浮んでは消える

瞬間という言葉が消え去ってゆく
うつろい、ゆらめき、そして――――海
たゆたいとうねりが何処までも続く

かすなものの広大なひろがりに
目を細めればヴァイオリンの音色が遠く
消え入るように水平線へと流れてゆく

形を失った愛がその上に見え隠れし
ぼんやりとした想いへと溶けてゆくうちに
僕の口からふと呟きがこぼれ出る
「来ておくれ、この腕の中へ」

(1984.6.16)

日暮れ

行くあてのない想いが消え去ったあの彼方から
頼りないオレンジ色の光が褪せてゆく彼方から
ゆったりとした波がこちらの岩を抱き締めに来る

佇む人の足下に座っている犬も待ち受ける
ほんのかすかな待ち人の希望がかなうことを
おそらくはその人よりも信じきって、待ち受けている

潮が満ちてくるにつれ、明るさが失せてゆく
このまま全てが闇の中に消え去ってしまうことが
この待ち人がただ、虚しく立っているだけだということが
彼には思いもよらず、ひたすら待ち続ける

今、揺らめきの中に沈もうとする時、その人はしゃがむ
その両手で彼の首筋がそっと撫でられたとき
彼には待ち人のかすかな淋しみと情愛と切なさと
未だ彼は見たこともない或面影とが感じられ、ふと傍らの人を見る

(1984.5.5)

一日

こんな小さな花のような
素直な微笑を持ち続けたい

こんなのどかな風景のような
限りない優しさを持ち続けたい

こんなやはらかな清風のような
さり気ない傍らの存在でありたい

こんなぼんやりとした陽光(ひかり)のような
温かな肌触りを与える人でありたい

そんな風な希いをもってこの昼日中
僕は地図を片手に野を歩き回る
何もかもがかすかに感じられてくる昼日中

*

地下鉄のシートに疲れ切って座る人の
心の奥に潜む希いを何気なくすくい上げたい
テーブルにうらはらの言葉を吐き棄てる人の
蟠りに相槌を打ってそっと寄り添っていたい
苦汁の諦めを陶酔と談笑に紛らす人の
かすかなゆらめきをじっと感じていたい
こんな華やかにきらめく灯りに照らされ
様々な生々しい人々と混じり合っていたい
そんな風な希いをもってこの都会の夜
僕は感性を片手にビルの谷間
何もかもが深く心に忍び込んでくるこの都会の夜

＊

激しい転調をくぐり抜けた後の夜更け
本とノートと音楽とに囲まれてこの部屋の中

僕は呟く―――「ひと、かぜ、まち」と・・・
(1984.5.2)

転調　　中部ドイツ

ほとんど単調なだけの、なだらかな平原はどこまで行っても
ただ、ゆるやかに起伏するだけの畑、畑、また畑
そんな中にぽつりと立っている老木は長い間
素朴な農民達の土臭い生活のなだらかな起伏を見つめ続ける
ここでは少し小高いところから見渡すと遠くまで見渡せるのです

欠伸の出そうな退屈な風景
間延びした全音符がずらり連なり
やたら分厚いオーケストレーションが
だらだらと果てしなく続く
クレッシェンドも眠気の中に埋もれる

消え入りそうな意識の中で
僕は寝転んでいた

広々とした野原に
ここで消えてゆく
消えてゆく

これが生活というものか…

老木が見下ろしている
どこまでも同じ平原
ほんの少しの風

そうか、これが生活というものか

向こうに見えるのは…
かすむように見える姿は…
こっちへ歩いて来るのは———

僕はここに居る
ここが見えるね
さあ、ここへ

(1984.3.31)

夕暮　　カペル橋（ルツェルン）

古い木造の橋には屋根がついていた
その下の梁には薄汚れた絵が何十枚も架かっていた
まるでおどけた亡霊のように、そして
あたかも時の流れをあざ笑うかのように
僕は不思議にそれらに親しみを覚えてかすかに笑う

澄んだ水の上には夕日の中に沐浴し
黒いシルエットの輪郭をオレンジ色にきらめかせ
水面(みなも)を見つめている水鳥たちがゆっくり滑る
少し下に架かる橋を渡る人々がすれ違うのを眺めるとき
僕はふれあいというものの肌触りを感じる

淡い光は、昼のそれよりも豊かに思え
橋の床がきしむ音は僕を静寂というヴェールに包み込み
全てがやはらかに寄り添い合う水辺に
苛立ちが、怖れが、鋭い感情の波形が
角を丸められてかすんでゆく夕べなのです

(1984.4.26)

古城　　ネッカー河（ドイツ）

人の希いを湛えながら、沈める鏡は
私に囁きかけてくる、或閉ざされた心を

川は右へ蛇行し、バスもそれに添って走る
流れているとも思われぬ水を追って

こぼれるような光の粒に目を細めて、僕の瞳は
かすかな揺らめきの中に見出した一言を呟く

消えてはきらめく希いのうつろいを映して
今も変らずに微笑する川のほとりに寄り添う人の姿

半身を陽光(ひかり)の中に、半身を影の中に置き
うつむいて音もなく歩く水と人を見下ろして
城は遠い丘の上、年老いた眼差しを閉じている

温かな温もりの充満が映像を印象と変え
ぼんやりと霞んで線を点の列に変え

呟いたばかりの一言さえ光の粒となってはじけ散る
（1984.3.28）

帰国

しっぽのカールしたねずみは花屋の前の
吹きさらしの台の上から彼女にもらわれ
今頃はきっと暖かな机の陽だまりの中
にっこり笑って彼女を微笑ませているかしら

僕が彼女に残すことのできたのは、きっと
そんな小さなお前という特派員だけなのだから
お前は僕の代わりに彼女を微笑ませておくれ
もし彼女がお前を見るのが辛いと言ったら
その時はこの僕のところへ帰りたいとお言い
きっと願いをかなえてくれるはず

そうしたら今度はお前はこの僕の前で
カールしたしっぽを振ってしっかりと
僕を慰めるためにあいさつをするのだよ
そうしたら一生めんどうみてあげるから

(1984.2.24)

夜吹雪

白い胸当てができるほどの雪花の舞
灯りに飛び込むように降りしきる
雲母紙(きらがみ)に描かれた――――ここは何処

傘を忘れた僕は傘のひしめきの間を
吹きつける氷粒にむせながらすり抜けてゆく
白い風に包まれ、肩を抱かれながら

散り消える白息は儚いこころの名残り
吹きだまりでふと立止まれば

胸の想いまで吸い込まれる静けさ

見上げれば追憶の奥から絶え間なく
ひっそりと落ちてくる結晶のひとつぶ、ひとつぶ
そっと手を擦り合わせる僕を微笑ませるように

凍えるまでこうして立ちつくしていようか・・・
でも、君の哀しみが降りしきるのなら――
もし、君も降りしきる中に居るのなら――

埋れそうになった残り火をかき立てて
灯りもないうすあおい風景の中へと
足元を探り、希いを探り、生命(いのち)を探り・・・

(1984.2.17)

世界へ

山道を下りようとする僕の目の前に
下界は明るく微笑を投げかけてくる
お前の懐で生きることを希って
僕はこんなに高い山の頂目指し
喘ぎ苦しみながら登ってきたけれど
ただ笑って迎えておくれ
そう、僕には愛することができなかっただけ

登りつめてゆくうちに掌の上から
次々と何かが飛び去ってゆくのを感じた
そうして次々と失ってゆくうちに
そうしてどんどん身軽になってゆくたびに
その重さと尊さを思い知った僕を
ただ笑って迎えておくれ
そう、僕には背負うことができなかっただけ

上る時は知ることだけが全てだった
下る今は愛することが僕の全て

嬉しさも哀しさも怒りも
ひとも、まちも、かぜもみんな
抱き上げるために帰る僕を
ただ笑って迎えておくれ
そう、僕は今、やっと僕になったから

(1984.2.12)

陽光

ちいさなおもいやりの数々の
ほんのちいさなおもいやりの毎日の
続くといい
途切れ途切れでも
続くといい

人のかすかな心の浮き沈みの
人のちいさな心のふるえの
わかってあげられるといい

少し肩を抱くほどでも
わかってあげられるといい

あたたかいひかりの
かすむようなひかりの
感じられるといい
ぼんやりとでも
感じられるといい

いつまでも
途切れ途切れでも

（1984.1.26〜2.1）

派長

僕はちょっと腕を伸ばす
君はちょっと腕を伸ばす
　僕の手は君の左胸に届く

君の手は僕の左胸に届く
僕はとても暖かくなる
君はとても温もりを感じる

僕はちょっと腕を伸ばす
君は精一杯腕を伸ばす

僕の手は君の左胸に届かない
君の手は僕の左胸に届く
僕は宙ばかりを掻いている
君は何にも受け取らない

僕は精一杯腕を伸ばす
君はちょっと腕を伸ばす

僕の手は君の左胸に届く
君の手は僕の左胸に届かない
僕は何だか物足りない
君は何だか空しい気がする

僕は精一杯腕を伸ばす
君は精一杯腕を伸ばす

僕の手は君の左胸に届く
君の手は僕の左胸に届く
僕は君・・・
君は僕・・・

(1984.1.21)